慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済地理学の実際的任務に関する一考察
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.9 (1935. 9) ,p.1327(83)- 1345(101)
JaLC DOI	10.14991/001.19350901-0083
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350901-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟地理學の實際的任務に關する一考察

小島榮次

はしがき

ヴェルナー・ゾムバルトに從へば、經濟學はあらゆる科學の中でその對象の最も曖昧糢糊としたものであり、地理學はそれに次ぐものである。（「三つの經濟學」小島昌太郎監修邦譯、東京雄風館版、一九三三年一頁）果して然るや否やは今これを問はぬけれども、少くとも斯かる碩學にしてこの言のあるところから見て、經濟學と地理學とから成る經濟地理學は、現在のところ諸科學中で最も多く未解決の問題を包含するものではなからうか。斯學の研究に手を着けてまだ日の淺い筆者には、その本質すら明かでない。多少の手掛りを把へてこぐちから徐々に問題の糸をほぐして行くつもりである。以下には先づ第一の手掛りとして、主として斯學が現實世界の經濟生活に關聯して如何なる任務を負ふかを一瞥し、その本質の考究に資したいと思ふ。但し現在の筆者には時間的餘裕がない爲め極めて、梗概的なものに過ぎぬことをお斷りし、豫め讀者諸賢の諒恕を乞ふ次第である。

一　「經濟地理學」成立の時代

經濟地理學は地理的環境と經濟生活との關係を研究する學問である。例へば氣候・地形・土壤・水陸の分布狀態等が如何なる結果を經濟生活に生ぜしめて居るか、人間の經濟活動例へば農耕・鑛物の採掘・鐵道の敷設・運河の開鑿等

に依つて自然は如何に變化せしめられるか、更に又斯くの如く變化した環境は經濟生活に如何なる結果を生ぜしめたか、而して又右の如き特定の地理的環境が或る特定の結果を經濟生活に生ぜしめたのは何故であるか、又人間の經濟活動が或る特定の變化を自然に對して與へたのは何故であるか、換言すれば地理的環境と人間の經濟生活との相互關係を媒介するものは何か、及びその媒介の仕方は如何、等を研究する學問である。

然し乍ら斯學は、その當初から斯くの如きものであつたわけではない。それどころか今日でさへこれと異なる見解を有する人々の方がむしろ多いであらう。從つて斯學の歷史に關する研究は、その本質を理解する上に於いて極めて重要であるが、淺學の筆者の今よく行ひ得るところではない。そこで、古來地理學が極めて實用的な學問でありその實際的任務が本質を決定して居たといふ事實に基いて、先づ經濟地理學の實際的任務即ち斯學が現實の經濟生活に對して勤める役割を一瞥し、これをその本質に關する考究の出發點にしたいと思ふ。

經濟地理學なる名稱は、一八八二年ミュンヘンの地理學者 Wilhelm Götz に依つてはじめて使用された。而もそれと同時に彼は、斯學と一般地理學との關係・斯學の本質及びその構成に就いて考察を行つて居る。（Alois Kraus, Versuch einer Geschichte der Handels-und Wirtschaftsgeographie. Frankfurt a. M., 1905. S. 75.）その以前には、商業・工業・物産・植民等に關する地理學が既に行はれて居たが、總括的な經濟地理學を樹立しようとする企圖はゲッツに始まると見るべきであらう。故にこの時を以つて、一應斯學の成立時代とし、その歷史に於ける一時期を劃することが出來るのである。

ゲッツ以前に經濟現象を地理學的に考察した勞作としては、第九世紀頃のアラビア人の著したもの殊に第九世紀半頃に著された Ibn Chordadbeh の「交通路及び諸國事情」から始まつて、（ebenda, S. 2.）この一千年の間に、勿論數へ切れぬ程のものがあらう。これ等が各國民の經濟活動に對して、大なる貢獻をなしたことは疑ひを容れない。商工業・植民地經營等に關係する實業家及び政治家達にとつて、國の內外に對する地理的知識が重要なことは、今更云ふまでないことである。大體、地理學それ自體から既に極めて實際的な任務を持つて居たことは何人もよく知るところである。まして斯かる經濟地理書が、夫々の時代夫々の國民に對して、右の如き實際的任務を果して居たことは、疑ひを容れぬところである。最初それは商業國民に依つて著され、商人に對して貢獻するものであつたが、近代に至り工業・植民地經營の勃興するに及んで、それ等の方面に關する地理書も現れるに至つた。

一八八二年に至つて「經濟地理學」なる名稱が使用され、これを一つの科學として樹立せんとする企圖が現れたのは、勿論決して偶然ではない。この時代に於いて、世界貿易・工業・植民地の經濟的發展等に依る經濟生活の複雜化が、個別的な商業地理・物産地理・工業地理・植民地理等を以つてしては、充し得ない地理的知識の體系を要求するに至つたからである。殊に八十年代の獨逸は、普佛戰爭勝利の後を受けて、旺盛な商業活動・積極的な植民政策の實施等を見、まさに國力の目覺ましき進展の時代であつた。單に商業・工業その他の部門のみに局限された地理學でなく、經濟生活全般にわたる地理學を樹立せんと試みられるに至つた根本的の動因は、實にこゝに求められると思ふ。而して當時に於ける經濟學の發達・特に獨逸に於ける地理學の發展は、より直接的動因の重要なるものとして擧げられ得るし、從つて他の國ではなく獨逸に於いてこの企圖が現れた所以も、了解されると思ふ。（註一）

註一　これ等の見解は、いづれ他の機會に經濟地理學の發展史を研究する際、詳細に肉付けしたいと思つて居る。

ゲッツは右に述べたやうに、科學としての經濟地理學樹立を企圖したのであるが、彼は「地球空間を人間の營利生活の基礎として理解し、同時に又それに依つて、國民經濟の自然的基礎が示されるやうにする」ことを以つて、斯

學の課題であるとし（Kraus, a. a. O., S. 80）而して人文地理學者 Friedrich Ratzel の影響を受けたが爲めに、氣候及び土壤等の自然的條件の經濟生活に及ぼす重大なる影響を强調して研究を進めた。この反對に當時に於いても例へば Ferdinand von Richthofen の如く、人間の經濟活動により重要な意義を認めて、それを研究の出發點とするものも存在した。（Peter Heinrich Schmitd, Wirtschaftsforschung und Geographie. Jena, 1925. S. 163. 參照）

然し乍らゲッツ時代及びその以前の經濟地理書に於いては、斯くの如き方法論を有せず、何の體系もなく、單に雜列的に諸國の經濟事情を記載したものも多かつたことは云ふまでもない。現在に於いてすら、「斯かる單なる實踐的知識の集積としての地理學は、（中略）世界特に獨英米地理學の主潮をなして居る」（川西正鑑著「經濟地理學方法論」東京、時潮社版、昭和八年、二六頁）と云はれて居る。勿論地理學者の仕事は、斯かるものに終るべきでない。古代及び中世に於ける場合と異なつて、拾九世紀以降に於ける地理書の材料は、世界交易の發展に伴ひ、非常に豐富に提供されるに至つた。外國に駐在する政府の機關・商工會議所その他の機關に依つて、內外の經濟事情・地理的條件の調査が、十分に行はれて來たのである。加ふるに植民地その他に移住民を送らうとする國の政府に依つても、多くの調査が行はれた。地理學者がこれ等の材料を分析綜合して科學的體系に纒めるのでなければ、地理書の實際的有用性は次第に低下するより他はない。通信機關・交通機關の發達その他一般に近代學術の進歩の結果として、比較的に遠隔地の事情を調査することが容易となり、他方資本の集積集中と共に、大資本を擁する企業或は企業結合が生ずるに及んで、今日では、個々の企業或は企業結合がそれ自體の利潤增大に直接役立たしむる爲めに地理的調査を行つて居る。これ等の調査は營業上の秘密事項に屬するが爲め、その成果は實際に事業の結果として現れるまで、外部からこれを知ることの出來ぬ場合が多い。然し乍ら、例へば一石油會社が或る地方の地質に就いて政府の地質調査機關よりも十分な知識を有するが如き場合があるに相違ない。（Karl Sapper's article on Economic Geography in the Encyclopædia of Soc. Sc. edited by E. R. A. Seligman, Vol. 6. New York, 1931. p. 628.）斯くして十九世紀末期の經濟地理學殊に記述的地理學は次第にその從來の實際的任務即ち主として資本家階級の利潤增大に貢獻するといふ任務を果し得ぬやうに傾いたのであつた。

二　方法論發展の時代

ゲッツに始まる經濟地理の科學としての建設に對する企圖は、實に右に述べたやうな地理學の實際的有用性の低下を防ぐものである。科學として經濟地理を研究すること、換言すればその研究對象の領域を定め認識上に於ける根本的觀點を把握し而して特定の研究手續きに基いて經濟地理を研究して行くことは、經濟地理學者以外の人々の單なる皮相的な觀察に依つて得らるゝよりは、一層正しい認識に到達することを可能ならしめる。斯くしてこそ從來の如く或はそれ以上に、實際の經濟活動に對するその任務を果し得るのである。こゝに於いて、各國の經濟的發展・經濟學及び地理學の進歩を背景として現れた「經濟地理學」の科學的考究は、漸次に發展を遂げるに至つた。殊に最も重要な問題として論ぜられたのは、斯學の研究對象に對する根本的觀點である。以下に、斯學の任務と關係する範圍に於いて、この方法論の發展を概觀して見たい。（註二）

註二　この他に方法論的意義を有する重要な問題は、斯學が地域の個性を記述する學問であるか、或は自然と人間との間の因果關係の法則を求める學問であるか、といふ問題である。今日でも未だこれ等二つの立場が對立して居る程で、重要な問題には相違ないが、本來人文地理學に於いて主として論ぜられ始めたもので、經濟地理學のみの固有な問題でないし、斯學の實際的任務と關聯しては次に述ぶる自然對人間の關係に對する觀點の問題程には重要でないので、その考究を他日

にゆづり、こゝでは省略する。但し次に述べる自然對人間の關係に對する考究も、最初は人文地理學者に依つて始められたのであるが、その後經濟地理學に於いて特殊の發展を見たものである。

斯かる意味に於ける方法論の主流は、自然と人間の經濟生活との關係に關するもので、大體に於いて次の如き諸說に要約される。（佐藤弘著「經濟地理學總論」改造社版昭和八年二三—八二頁、川西、前揭書、三〇—二三八頁參照）

即ちいづれも、氣候・地形・土壤・水陸分布狀態等の自然的條件が人間の經濟生活に影響する一方に於いて、耕地を作り鑛物を採掘し工場を建て鐵道を敷設し運河を開鑿する等、人間の經濟活動が自然環境へ作用するといふ相互的な關係の存在を主張するのではあるが、その中でも、自然的條件により大なる重點を置くものと、人間活動に重點を置くものとがあり、更に兩者の間に同値的な同權的な交互作用を認める人々がある。而してこれ等の諸說は、時代的にも大體に於いてこゝに擧げた順序で現れた。尤もこれ等以外にも、自然的條件が人間生活のあらゆる方面を規制すると主張する說や、その反對に人間の技術の發達は自然的條件を克服すると考へる說もあるが、前者は主としてゲッツ以前に屬するが故に、又後者は主として地理學者以外の人々の地理學否定論であるが故に、こゝでは考察圈外に置かれねばならぬ。

自然と人間の經濟活動の同値的同權的交互作用を認める說は一九二〇年代に現れ、爾來最も有力な斯學の方法論として容認されたのであるが、人間活動をより重要視する說が勢力を占めたのは、大體に於いて大戰前に屬して居る。更に又、自然偏重の見地が勢力を占めたのは、大體に於いてその以前に屬して居る。尤も、既に勢力を失つた諸說を守つて居る人々も、常にあり得ることは云ふまでもない。從つて、これ等の說が夫々最も勢力を持つて居た時代から考察すると、先づ第一の自然偏重の見地は、自然環境に基く宿命論とも云ふべきその以前の地理學的觀點の影響を受けて居ると見られるものである。然し乍ら當時の獨逸に於いては、前述の如く既に旺盛なる經濟活動が行はれ、著しき經濟文化の發展が起こりつゝあつたが故に、斯かる見解に基く經濟地理學は間もなくその實際的任務を果し得なくなりその勢力を失ふに至つたと解釋し得る。

次に、人間活動を重要視する說は主として大戰前までの獨逸に現れたのであるが、當時の獨逸は、植民地經營に於いてこそ、英佛等の國々に立ち遲れたが爲めに、それ等の國と比較して少き利益しか得られなかつたが、バグダッド鐵道を基礎とする近東地方への進出・キール運河の開通及びその擴張・國內諸產業の急激なる發展・科學及び技術の著しき進步等に依つて、英佛に遲れて產業革命を經驗したに拘らず、大戰時までにはこれ等の先進資本主義國の壘を摩する發展を遂げた。又この時代には、他の諸國も獨逸程急激にではなかつたが、その經濟的勢力を增大せしめて居り、旺盛な經濟活動が行はれた。獨逸に於ける斯くの如き急激な發展の時代、人間の活動が旺盛を極めた時代に、右のやうな見解が同國に現れたのは當然のことに思はれる。これに反して、一社會の經濟的發展が停滯靜止の狀態にある時には人は自ら自然の人間生活に對する影響に主としてその注意を惹かれ、人間の活動に重きを置かぬ傾向を持つに相違ないのである。而して又この時代の獨逸の如き經濟活動の極めて旺盛な社會の人々は、自己の積極的な自然への働きかけに忙しいのであるから、その方面の研究を重要視する地理學に依つて利益されるところが比較的大きいに相違ない。（註三）

註三　この時代に、地理的事實を羅列することなく、演繹的方法を以つて、經濟活動と場所との因果關係の理論を探究する所謂生產立地論が Alfred Weber, Ueber den Standort der Industrie, 1909. に於いて現れて來たことを注意せねばならぬ。これは von Thünen に依つて嘗つて抱かれた見解ではあるが、ウェーバーに至つて、工業家にとり最も大なる實用價値を

有するものとなつた。然し乍らウェーバーの樹立したのは、單に經濟地理學の一部分に過ぎぬ。これをその儘經濟地理學とは云ひ得ないのである。（菊田太郎著「生産立地論大要」東京古今書院版昭和八年、參照。）

斯くの如く考察を進めるならば、自然と人間活動とのいづれをも偏重せずといふ立場が、一九二〇年代にこれも主として獨逸に於いて現れたことも了解出來ると思ふ。即ち一九二〇年代の獨逸は戰後疲弊の獨逸である。巨額の賠償金支拂の義務を負はされ、植民地及び重工業の資源を奪はれ、生産機構は根底から破壞された獨逸である。經濟活動は停滯と云ふよりむしろ後退して居た。而して他の諸國に於いても、米國を除いてその殆どすべてが經濟的不況の狀態にあつた。斯かる時代に於いて、殊に悲慘な狀態にあつた獨逸の經濟地理學者が、人間活動偏重の見解を排して、所謂交互作用の理論へ進んだのは、極めて自然の推移だと思はれる。戰敗の結果從來に比較すれば著しく貧弱な自然的資源しか持たぬ國民と成り終つた獨逸人が再びその國力を恢復せんが爲めには、この限られた自然的資源を出來得る限り有效に利用し得ねばならぬ。而してそれには、自然をいま一度改めて見直し、そのより集約的な利用の方途を見出さねばならなかつたのである。從つてこの際に於いては、右の交互作用の理論に據る地理學が最も有用な地理學だつたのである。

斯くして十九世紀末期から大戰後に至る間に於ける經濟地理學方法論の發展が、變化し行く經濟狀態に應じて、斯學の有用性を失はしめぬやうに、云ひ換へれば斯學の實際的任務を相變らず果して行くことが出來るやうに、相繼いで起つたのである。（註四）それは常に、主として先進資本主義國に於ける資本家階級の利潤增大の爲めに奉仕して來た。然らばその後に於いて斯學の實際的任務はどうなつたか。又それと關聯して方法論は如何なる發展を遂げたであらうか。

註四　筆者はこゝで、方法論の發展が、斯學の實際的有用性を失はしめぬが如き方向へ向つて起こつたことを指摘するのである。經濟狀態の變化と方法論の發展との因果關係は、恐らく筆者がこゝで示した見解の如き簡單なものではなからう。この點に關するより十分な考究も、他日斯學の發展史研究の際にゆづる。

三　計畫經濟と經濟地理學

大戰後に始まつた世界恐慌は、一九二〇年代の終りに至つて米國の金融恐慌に依り一層深刻化した。資本主義諸國は、「計畫經濟」或は「統制經濟」・經濟ブロックの形成等に依つて、この窮境を打開しようとするに至つた。而してこれ等の運動はすべて、夫々の地域に於ける地理的環境のより一層の利用を、その基礎的の部分とする。或は夫々の地理的環境によりよく順應することと云つても宜いであらう。自然は吾々人間の經濟生活の基礎である。吾々の勞働對象も勞働手段も而して勞働力も、究極的にはすべてそこから與へられる。だから吾々が經濟生活をより一層計畫的ならしめようとすれば、先づ第一に地理的環境をよりよく利用する方法を考慮せねばならない。經濟地理學はまことに斯かる考慮に當つて必要欠くべからざる知識を提供するものである。從つて、資本主義國に於いても「計畫經濟」或は「統制經濟」の運動が旺盛となつた現在では、資本主義國の經濟地理學は、その從來の實際的任務即ち主として個別的資本家或は資本家團體の利潤增大に寄與するといふ任務よりも、今やむしろ、資本主義經濟機構の維持換言すれば全體としての資本家階級の利益に奉仕すべき任務を負はされるのである。即ち國内の一地方或は一國全體或は數國或は更に廣大なる地域にわたつて、その地理的條件の最も有效なる利用を可能ならしめることに依り、この「計畫經濟」「統制經濟」經濟ブロック運動等を成功に導くといふ任務が負はされるのである。まことにこれこそ現在の經濟地理學に負はれた最も重大な任務と云はねばならぬ。（註五）第一節の終りに言及した如く、個別的な資

本家或は資本家團體は、今日の通信機關・交通機關の進歩及び大なる資力の所有に依つて、自身の經濟活動に關係する地理的調査を行ひ得る。この意味から云つても、現在の經濟地理學の最も重大な任務は、從來のそれと異なつて來たと主張し得るであらう。

註五　黒正教授は、「行き詰りに喘ぐ國民は、打開策として所謂合理化なるものを唱へつゝあるも、之は全く人的編制の合理化に關するのである。果して如何なる結果を齎すかは大に議論の餘地がある。之よりも一層急務であり且つ有效なりと考へらるゝものは、我國民經濟の地理的研究をなす事によつて、その地理的編制を合理化する事である」（「日本經濟地理學」岩波書店、昭和六年序文三頁）と云はれ、同樣な意見を抱かれるらしい。但し教授はこの地理的編制が何人の爲めのものかを明かにされてない。

こゝで資本主義經濟の發展に伴ふ經濟地理學の實際的任務並びにその方法論の變遷を通觀すれば、要するに、初期の市場擴張の余裕大なる時代には方法論なき單なる地誌的記述を以つて十分その任務を果し得たのであるが、漸次に生産力の增大その他の原因に依つて市場が狹隘化するに至り、自然の集約的研究が必要となり、從つて方法論も發展し、遂に今日の高度資本主義經濟に及んで、斯學の任務も亦前述の如きものに變化したと見ることが出來やう。

ソヴィエト聯邦に於いても、經濟地理學者は同國の社會主義經濟建設に對して重大な任務を課せられて居る。即ち彼等は、同國の現在に於ける經濟活動の諸型が地域的に如何に分布されて居るか、又自然資源の分布は如何等を研究し、これ等の自然資源の組織的な開發並びにそれ等の地域の經濟的發展を可能ならしむべき實際的の綱領を樹立する仕事に當つて居る。（Sapper, op. cit., p. 627. レニングラード大學經濟地理學研究所編、橋本弘毅譯、「經濟地理學方法論」叢文閣版、昭和九年、拙稿「橋本弘毅譯經濟地理學方法論」三田學會雜誌、第二十九卷第三號、昭和十年二月、參照）加ふるにこれ等の人々は、資本主義國の研究にも手を延ばし、彼等獨自の研究視野から、「資本主義の到達すべき必然の運命を意識し得させる」（橋本譯、前掲書、三頁）ことに努力するのである。

このソ聯邦に於けるが如き任務を持つ經濟地理學が、從來の方法論を以つて滿足し得ぬことは云ふまでもない。斯くして、ソ聯邦にあつては五ケ年計畫第一年度が豫期以上の實績を擧げたと云はれ資本主義國に於いては恐慌が益々深刻化しつゝあつた一九二九年に、マルクス主義に基く方法論が現れるに至つた。即ち Unter dem Banner des Marxismus, III. Jahrgang, 1. 4. u. 5. Hefte. に掲載された Karl August Wittfogel, Geopolitik, Geographischer Materialismus und Marxismus に於いて展開されたものがそれである。（川西正鑑譯補「地理學批判」東京、有恒社版、昭和八年）

ウィットフォーゲルはマルクス及エンゲルスの所論に從つて、自然と人間との間に特殊な相互關係を認める。從來の經濟地理學に於ける交互作用の理論は、一方に自然を他方に人間を對立せしめ、その兩者が相互に影響し合ふ關係にあるとするのであるが、彼は斯かる關係の存在を否定し、人間も結局自然の一部であるが故に自然と人間を相互に分離した二つのものとして對立せしめることは出來ないと云ふ。唯、人間は能動性を持つて居り、その故に全く特殊の動物となる。自然と人間との對立は斯かる意味に於いてのみ存在する。（Unter dem Banner des Marxismus, III. Jahrgang, Heft 4, S. 505-7. 川西譯、前掲書、一四一―四頁參照）彼は勞働過程の諸契機を勞働力・勞働手段・勞働對象の三者であるとし、この三者の夫々に自然的側面と社會的側面とを分析する。自然的側面とは、自然の一部としての勞働力及び自然の儘なる勞働手段と勞働對象とであり、社會的側面とは、社會生活の結果生まれて

來たこれ等三契機である。即ち彼の場合にあつては、單純な直接的な自然對人間の關係ではなくて、自然（人間の自然的側面をも含めて）は勞働力・勞働手段・勞働對象に具體化することを通じて勞働過程に影響し、勞働過程を通じて人間に影響を與へるのである。即ち自然は勞働過程の媒介を通じて人間に影響を與へるのであつて、從つてその影響が如何なる結果を生ぜしめるかは、媒介たる勞働過程に依つてきまるとするのである。而してマルクス主義經濟學の理論に基いてこの生産關係を分析することに依り、特定地域の經濟地理を明かにしようとするものであつて、その結果例へば、植民地が原料産地であるといふ經濟地理的現象は、先進資本主義國の强制に基くといふが如き說明が生まれる。（註六）、ソ聯邦に於ける大規模な生産力配備に對し、又資本主義諸國に對する批判に對して、斯かる方法論に基いてこそはじめて斯學はその任務を果し得るものと云ふべきであらう。

註六　これはマルクスが既に資本論第一卷中に示して居る見解である。（高島譯、改造社版、第一卷第一册四三五―六頁、橋本譯、前揭書、二七―八頁に引用）

明かに自然は人間に對して直接的な影響を持つ。然し乍らそれは人間の生物學的・生理學的方面に於いてのみ重要性を持ち得るものであつて、經濟生活に關する限り、間接的影響がより重要である。例へば今日の人智を以つては、植物の全く生活し得ない氣候及び土壤を有する地域で、農業に依る經濟生活は營まれない。然し乍ら他方に於いて、より好良な自然的條件に惠まれた土地が比較的劣つた條件を有する土地よりも多い收穫を與へると限らぬことは云ふまでもない。故に自然と人間との關係を考究するに當つて、何等かの所謂「中間項」を認めねばならぬことは、社會主義の立場をとらずとも、經濟學的知識を有する者には明かであつた。然るに地理學者の研究はこれを忘れ勝ちであつたから、ウィットフォーゲル以前にも、經濟學的な知識を十分應用して、經濟學と地理學との綜合としての經濟地理學を樹立すべきであるといふ主張も早くから行はれたのである。（P. H. Schmidt, a. a. O. 伊藤秀一「經濟地理學研究に關するシュミットの見解」三田學會雜誌、第二十卷第三號、大正十五年三月、參照）然し乍ら資本主義國に於ける斯かる見地に基いた方法論は未だ確立されたとは云ひ難い。交互作用の代表的理論家 Bruno Dietrich の理論に於ける「文化水準」及び「時代相」は、一種の斯かる中間項の意味を持つたものであらうが、(Grundzüge der Allgemeinen Wirtschaftsgeographie. Berlin, 1927. S. 29-35. 佐藤、前揭書、五七―七〇頁、參照)この理論は交互作用を、一つの定式に表現した點で特長を持つとはいへ、さて然らば「どうしてある地域の經濟文化を上述の定式化から說明するか、の問題はハッキリせぬ。」（佐藤、前揭書、六九頁）（註七）

註七　こゝに於いて本邦の佐藤・川西兩教授は、主としてディートリッヒの交互作用の理論とウィットフォーゲルの理論とを結合せしめることに依つて、夫々獨自の方法論をうち立てようと企圖されて居る。（佐藤、前揭書、八三―一二一頁、川西、前揭書、二四一―三三八頁參照）

要するに現在及び將來に於ける經濟地理學の最も重大なる實際的任務は、計畫經濟の遂行への寄與である。それが一國内の或る局限された地方であると一國全體であると或は數ケ國或は更により廣大な地域にわたるとの如何を問はない。これは又より一般的に、地理的環境の合理的な利用の實行に役立つこととして云ひ現すことも出來る。但しその場合の合理的利用は、個別經濟的な意味での合理的利用でなくて、一國全體の人間或は更に多くの人間全體にとつての、而して理想的には全人類にとつての合理的利用でなければならぬ。これこそ實に經濟地理學の理想と云ふべきであらう。而して斯かる合理的利用は、結局計畫に基かねばならぬのであるから、計畫經濟への寄與と云ふのと同一である。社會主義經濟の到來を信じて大衆の福祉がその時に始めて實現されると主張する人々にと

つては、經濟地理學の奉仕する計畫經濟は社會主義制度の下に於けるそれであると看做すであらうし、資本主義經濟こそ人類の福祉を最大ならしむる制度なりと信ずる人々にとつては、それは資本主義の「計畫經濟」を意味するであらう。更に又、經濟組織に關するこれ等及びその他の如何なる見地をもとることなく、一般に人口の增大に從つて地表の狹隘化を憂へ、それに備ふるが爲めの自然の合理的利用に寄與することを以つて、斯學の任務なりと解する人々もあり得る。（第五節參照）

經濟地理學が科學であるならば、實際的任務以外に、科學としての任務を持ち目的を有せねばならぬ。從つて科學として一般に認められる今日の經濟地理學は、上述の如き實際的任務の如何に應じて諸種の立場をとるわけではない。然し次節に述ぶるが如く、經濟地理學の研究に必要な經濟學的考究は、自ら經濟地理學の立場を規定して來るであらう。

四　「計畫經濟」と經濟地理學（續き）

前節に於いて、經濟地理學が計畫經濟へ寄與することを以つて、その最も重大なる任務であるとしたが、その理由は、斯學が斯かる貢獻を行ひ得る性質のものであり而も斯かる貢獻が切實に要求されるといふこと、個別的資本家或は資本家團體が現在では既に斯學からの援助を從來程必要としないといふこと、及び更に根本的には、現在の無政府的生產に代ふるに消費に對する計畫に基いた生產を行ふことが望ましいといふことである。

然らば何故計畫經濟が望ましいか。この問に答へる必要は全くないであらう。無計畫な生產の結果として現在の如く苦惱しつゝある世界各國の國民は、何人もそれを翹望する筈である。然し乍ら、單に望ましいといふだけでなく、それに對して經濟地理學が寄與すべきであると主張し得るが爲めには、それが實行可能であることを前提とせねばならぬ。然らば果して計畫經濟は實行可能であらうか。又實行可能とすれば、如何なる條件の下に實行可能であらうか。この問に對しては少くとも消極的に答へることが出來る。即ち現在の資本主義制の下に於いてはそれが不可能であり、從つて何等か他の制度へ移ることを條件としてのみ實行可能であると。人がその私有財產に據つて利潤を追及することが許されて居る現在に於いて、利潤以外の動機に依つてその經濟活動を律すべきことを要求しても、それは到底不可能である。米國に於けるニュー・ディール政治が蹉跌に當面するまで、政府と私企業とが非常に屢、衝突した事實は、これを明瞭に示して居る。一方この反對に、利潤追及の動機を極端に制限したソ聯邦に於いて、計畫經濟が着々と實施され且つその成績を擧げて居ることは、何人もよく知るところである。故に資本主義を支持する經濟地理學者が、所謂資本主義「計畫經濟」「統制經濟」に寄與せんとするもそれは不可能であり、從つてこれ等の經濟地理學者は、斯學をしてその最大の有用性を發揮せしめることが出來ないであらう。而もそれにも拘らず、見解の相違から、斯かる「計畫經濟」を支持せんとする人々もあり得ることを認めねばなるまい。然らば現在の組織から、計畫經濟を可能ならしむるが如き何等か他の組織へ移ることが出來るか。經濟學の研究は、これに對して解答を與へる。即ち經濟的發展の法則に依つて、斯かる社會へ移行することが、自ら可能となされるであらうと。

經濟地理の研究者としては、利潤の維持或は增大をではなく大衆の福祉を目標とするが如き計畫經濟の實行に必要欠くべからざる知識を、その專門的な研究の結果として提供することが出來ればそれでよい。如何なる經濟組織の下に於いてそれが行はれようと、それは本來斯學研究者の問ふところではないやうに見える。然し乍ら、經濟生活に於ける地理的環境の利用は、それが經濟生活の一部である以上、經濟組織と引離すことの出來ぬ關係にある。從つて斯學の研究に從事するものは、右の如き性質を持つ何等かの經濟組織を想定することを以つて、研究着手の

準備とせねばならない。現在の資本主義社會に於いて、大衆の福祉を齎すが如き態樣に於いて地理的環境の利用が行はれて居ないことを指適するのは、當然斯學研究者に課せられた附隨的の任務である。この場合に於いても、一應それは右の如き特定の經濟組織の想定なくして行はれ得るが如くであるが、究極に於いては、大衆の「福祉」に就いて批判の基準を設けねばならず、結局右の如き想定が必要となるに相違ない。斯くして、經濟學の研究に依り、經濟發展の法則が現在の組織を變化せしめ、いつかは計畫經濟の可能な組織に到達せしめることを學ぶのは、經濟地理の研究者にとつて必要な準備である。經濟學は斯かる意味に於いても、經濟地理學にとつて大なる重要性を持つ。（註八）

註八　他方經濟地理學は、經濟學の補助科學たる性質を有する。

經濟地理學はそれ自體の論理的基礎の上に構成されねばならぬけれども、今斯學の實際的任務を以上の如く考察することに依つて、今後の斯學の方法論の基礎も、經濟的發展の諸法則の理解から得られる將來の經濟組織への豫見に基いて、現在の地理的環境（註九）と經濟生活との關係及びその將來の可能性を明かにするといふ見解の上に置かれねばならぬことが了解されるのである。方法論の詳細なる考究は勿論他の機會にゆづらねばならぬけれども、要するにそれは、斯學の研究に依つて或る特定の經濟地域に於ける地理的環境は如何、過去に於いてそれは如何なる自然的及び文化的作用の影響を受けて現狀の如くになつたか、又それは將來に對して如何なる可能性を有するか、等を明かにすると共に、その地域の經濟現象は如何、その形成に對して地理的環境は如何なる役割を勤めたか、又將來に於ける可能性如何、を示す等、すべて、何故一定の經濟現象がその場所に生じたか又將來のその場所に於ける經濟現象の可能性如何を明かにする要因を探究し、併せて特定の地理的條件及び經濟現象が地球上に如何に分布されて居るか、それは又何故であるかを示すことを可能ならしむるが如き方法論でなければならぬ。

註九　この地理的環境といふ概念が、筆者には未だ判然としない。現在のところ筆者は、これを自然・自然環境・經濟現象に於ける自然的契機等と異なつたものに解釋し、人間の經濟活動の結果として成つたものを然らざるもの（即ち自然）との兩者を含むものと看做して居る。換言すれば、漠然たる言葉かも知れぬが、場所的環境といふ意味に解するのである。斯くすることに依つて、特定の地域の經濟現象に對する該地域そのものゝ意義を、最もよく把握し得るのではなからうか。若し斯かる有用性を持つ概念であつたならば、今それが如何なる種類の「環境」を含むか判然しなくとも、直ちにそれを放棄することは出來ぬであらう。

五　結　語

以上述べたところを要約すると、經濟地理學は地理的環境と人間の經濟生活との關係を取扱ふ學問である。それは主として資本家階級の利潤增大に寄與することを以つて、その主たる任務として居た。而して經濟的文化の發達に伴つて、この任務は、斯學に於いて相異なる方法論を必要としたが、事實斯學の方法論は斯かる方向へ發展して來た。而して最近に於いて、計畫經濟が要望さるゝに至り、斯學の實際的任務は、個別的資本家への奉仕から一轉して、全體としての資本家或はさもなければ一般大衆の經濟的福祉への奉仕へと、變化すべき位置に立つこととなつた。何となれば、斯學は地理的環境と經濟生活との關係を取扱ふものであり、計畫經濟の遂行は斯かる方面の知識を必須のものとするからである。他面從來の如き實際的任務は、今やその重要性を減少せしめられた。故に筆者は、計畫經濟への大衆の爲めの奉仕こそ、現在及び將來の經濟地理學が正に負はさるべき實際的任務であると考へる。從つてまたこゝに新しい方法論を必要とするに至る。その新しい方法論は、經濟的發展の諸法則の理解に基い

て、大衆の福祉の爲めの計畫經濟が實行さるべき經濟組織の到來を豫見し、それに基いて現在の經濟組織の下に於ける地理的環境と經濟生活の關係及びその將來の可能性を明かにする、といふ見解の上に立てられねばならぬ。

斯くの如く經濟地理學の實際的任務を考察することに依つて、吾々はそれが過去に於いて極めて鮮明なる階級的性質を帶びて居たことを知り、又將來に於いても同樣なるべきことを知つた。超階級的立場は理論上あり得ても、その研究は殆ど無意義である。何となれば、地理的環境と經濟生活との關係は社會關係の一部であつて、當然經濟組織が介入して來る。從つてこの兩者の關係の眞實の姿を明かにするが爲めには、經濟組織及び社會階級等の問題が考察されねばならぬ。地理的環境と經濟生活との關係に、經濟組織を超越した部分もあり得るけれども、社會科學の一つである經濟地理學に於いて、斯かるもののみを取扱ふのは無意義である。（註一〇）

註一〇　例へば經濟地理學は「正に切迫する地球の充足について常に考察し、地球表面に於ける人間の意のまゝになる自然の補助手段に論及すべきで」あると云ふが如き（A. Penck, Das Hauptproblem der physischen Authropogeographie. Zeitschrift f. Geopolitik, 1925. Heft 5, S. 342. 佐藤弘著「經濟地理概論」東京、古今書院版、昭和五年、四頁、に於ける引用に依る）「經濟地理學をして資本主義的階級束縛より解放せしめ、之れに科學的獨立性を與ふる爲めには、從來多くの學者の唱へたるものとは異りたる體系を確立し、新しき內容をもたねばならぬ」と云ふが如き（黑正、前揭書、一四頁）兩者とも夫々異なつた理由でこの文面通りに解釋して正しいか否か解らぬけれども（即ち前者は原書を直接に見て居ない爲め、而して後者は「階級的束縛より解放」の意味するところが、單に資本家階級への奉仕に束縛されて居たのを解放するといふ意味かも知れぬ爲め）假に文面通りに解釋すれば、これ等は何千年先に來るかも知れぬ「地球の充足」に就いて考慮し、無意義な「科學的獨立性」を與へようとするものと云ふべきではなからうか。

要するに經濟地理學は、從來極めて實際的な學問であつた。これを科學として成立せしめようとする企圖は、夙に五十數年前から行はれて居るが、未だにその本質・對象・方法・その他に就いて、多種多樣の見解が行はれ、人をして去就に迷はしめる。この際、先づ斯學の實際的任務に就いて、正しい理解を得て置くことは、斯學の本質を探究する第一の端緒であらう。何となれば、斯學は過去に於いて一つの實用學問から發達して來たものであつて、從つてその實際的任務は、とりも直さずその本質を決定するものだつたからであり、且つ又、今後の經濟地理學に於いても、この實際的任務の正しい理解は缺くことが出來ぬからである。即ち、科學としての經濟地理學はそれ自體の論理的基礎の上に構成されねばならぬけれども、如何なる場合に於いても、こゝに述べたが如き實際的任務と矛盾するが如きものであり得ないと考へるのである。（註一一）

註一一　勿論、科學として成立した時の經濟地理學は、上記の如き實際的任務以外に、科學としての任務を有し目的を有する。それ等につきこゝでは言及することが出來なかつた。もと本稿は「經濟地理學の研究目的に關する一考察」と題して執筆し始めた論文の前半である。筆者はその論文に於いて、先づ斯學の實際的任務を述べて過去に於ける斯學の本質を明かにし、次に科學としての任務及び目的を考究する豫定であつた。然るに筆者の經濟地理學の論理的基礎に對する考察の不十分さは、後半の部分に意外の時間を費さしめたが爲め遂に豫定の計畫を完了することが出來ず、前半だけを切り離しこれに獨立論文の體裁を與へて發表した次第である。

（昭和十年八月二十五日記）